

ラセヴィツにある結核病院に入院したが、7月には医者から日本に戻って治療する必要があると言われ、留学途中であったが帰国を決意にするに至った。日記によると1877年7月22日午後8時にフライベルクを発って帰国の途についた。急遽、今井も同行することになった。そしてミュンヘン、ヴェローナを経て、25日ヴェネチアに着いた彼らは、そこでゴンドラを雇って楽しんだりした。30日、ストレッチ号に乗りプリンジシを出帆。その後アレキサンドリア、アデン、ボンベイ、ペナン、シンガポール、香港に寄港して進み、9月16日の夕刻横浜に到着した。フライベルクを出て57日目であった。以後有名なベルツ博士の診察を受けるなど治療と療養に努めた。やや回復したところで文部省に出仕した。そして専門学務副局長などを経て文部少書記官に昇進した。だがこの間、病気が再発したため非職を命じられ、熊本に帰って療養を続けた。

現在、国立公文書館には療養のため休職を願っている文書がいくつか残されている。だがその甲斐もなく、安東は1886年（明治19）9月17日、やはり療養で訪れていた山鹿温泉で亡くなった。享年33。死後、郷里の長洲町の四王神社には、文部省や、安東も生前会員であった独逸学協会の関係者によって「安東清人君記念碑」が建てられた。碑文は品川弥二郎の撰になるもので、安東の略歴を記し、その早い死を惜しんでいる。ちなみに、石碑建立に寄金した18人の名を石碑の裏側に刻んであるが、その中には中沢岩太、高橋順太郎、中隈敬蔵、木場貞長、寺西多喜雄、村岡範馳雄、寺田勇吉、飯山正秀などのドイツ学者やドイツ留学経験者が見られる。

安東の独逸学史上の意義は、明治初年、英、仏語に比べ学ぶ者がまだ少なかった頃、いち早くドイツ語を学び優秀な成績を修めたこと、第一回文部省派遣の留学生としてドイツ留学したこと、明治時代の冶金学者や鉱山学者は多くフライベルク鉱山大学に留学しているが、安東は今井と共にその先蹤となったこと、そしてドイツ化学論文の翻訳などである。明治11年に今井と共著で『金属鍍法』という金属メッキの本を出している。薄っぺらな本だが、これは留学の成果であると同時に二人の友情の証しであると見なして良いであろう。

熊本藩貢進生 神足勝記

明治新政府は、各藩から学術と品行の卓越した子弟を選抜し中央に集め、欧米の進んだ学術を授け、国家有用の人材を養成する目的で貢進生制度を設けた。そして明治2年（1869）7月27日、太政官より各藩に対して人材を貢進して大学南校に入学させるような通達が出された。

「 告

大学南校ニ於テ外国教師御雇相成人材成育被為

在候間藩々ニ於テ

現高拾五万以上 三人

同 五万石以上 二人



神足勝記 御料局測量課長時代（神足勝浩氏所蔵）

同 五万石未満以下 一人
右之通拾六歳以上二十歳マデ人材相撰来ル十月
迄へ南校可差出候、尤年限学資等之儀ハ南校ニ
テ可承合事
但是迄南校入舎之内其撰ニ当候者有之候ハ、差
加へ不苦候事 以上 』

この通達によって熊本藩は貢進生3名を送った。貢進生は入学に際して修得すべき外国語を英仏独の中から一つを選択しなければならなかった。熊本藩の貢進生では、木下広次が仏語、安東清人と神足勝記が独語をそれぞれ選択した。これは全国的にはやや異例であった。貢進生制度で入学した者は三百余名だが明治4年1月22日の「改正貢進舎生名簿」では、総数310名、その内訳は英語専修219名、仏語専修74名、独語専修17名であったからだ。当時熊本には独語や仏語を教える学校はなかったが、英語については米国留学生の横井大平が子弟を集めて教えていたし、米人ジェーンズを招聘して熊本洋学校を設立（明治4年）することも前年から話題になっていた。こうした事情から上記のような語学選択になったと考えられる。三人の貢進生のうち後年一高校長や京都大学総長を務めた木下が有名である。安東は大学南校でも最優秀な生徒であり、明治8年、東京開成学校生の時、文部省派遣の第一回留学生としてフライベルク鉱山大学に学んだ人だが、帰国後夭折した。郷里の玉名郡長洲町の四王神社に記念碑がある。（碑文は品川弥二郎の撰になる）

神足勝記（1864-1937）は安政元年9月9日（旧暦）、現在の熊本市内坪井町に生まれた。父の浅右衛門は御中小姓組として藩主細川越中守に仕え、御用番を務めた。文久3年勝記は藩校時習館に入学した。時習館の教育は文武二道のほか、特に義を重んじた。

1870年（明治3）8月、神足は15歳の時熊本藩より貢進生として大学南校へ留学を命じられた。前述のごとくその際神足は安東清人と共に独語を選択したが、それは『神足勝記回顧録』によると、同じく熊本藩士で当時大学南校舎長だった井上毅（梧陰）の勧めによるという。大学南校へ入学したのは明治3年12月17日である。そしてスイス人教師カデルリーについて初めてドイツ語を学んだ。学資として藩から一カ月12円を支給されたが、これで衣食・書籍代など何んの不自由もなかった。貢進生は必ず帯刀して登校したが、廃藩置県後、東京にいる士族は申し合わせたようにそれをやめた。だが熊本藩の者は、頑固に明治9年の廃刀令まで帯刀したという。

さて、貢進生制度は早くも明治4年7月廃止され、大学南校も単に南校と称することになり、大学の管轄を離れ、文部省の管轄となった。

『南校一覧』（明治5年4月改）を見ると、神足が属した独一之部に前記安東清人のほか、関澄蔵、保志虎吉、村岡範為、和田維四郎、寺田勇吉、独二之部に下山順一郎らがあり、独三之部に志賀泰山、中村弥六、丹羽藤吉郎、独四之部に緒方源喜（正規）、佐藤三吉など後年それぞれの分野で名を為した人々がいる。独一之部はローゼンスタン教師の担当で、科目には文典・地理学・算術・窮理学・博物・代数・幾何・読方・作文・書取・体操があった。教科書はすべて独逸書を用いた。南校はその後第一番中学、開成学校、東京開成学校とめまぐるしく

改称し、専門学校化した。だが専門学科に英仏独の三カ国の外国人教師を招聘することは大の経費を要するので、専門学校では以後英語によって修業すべき旨を発令した。そのため神足のように独語を修めた学生のために鉱山学科を、仏語生のために諸芸学科をそれぞれ設けた。次いで明治8年7月、東京開成学校は独仏両語をやめて英語だけ残し、独語生には化学、仏語生には物理学に限って修学させることに決した。この時、学生は或いは英語に移り、或いは医科に転向する者もいた。神足は家を思い、母の老齡を考え、10月15日付でやむなく退学した。

最近筆者は、神足が大学南校から開成学校時代にかけて用いたと思われる辞書・教科書（すべて独逸書）を神足勝浩氏より寄贈された。すなわちF・ウェーベル独逸辞書をはじめ、リュウベン第一読本、同第四読本、同第五読本、コッペ平面幾何、同平面三角、同立体幾何、同数学・代数、レードニッツ第一算術書、同第二算術書、メンツェル暗算書等で、いずれも1870年から74年にかけて出版されたものであった。書き入れは見られないが、こうした重厚な原書を教科書に用いたことは、進んだ西欧の学術を真剣に学び取ろうとした姿勢が窺える。それは語学上からも有効だった。

明治9年5月、彼は内務省地理寮に雇用され気象観測に従事、役人生活を始めた。以後、東京外国語学校ドイツ語教員、工部省鉱山局勤務、内務省御用掛（地理局）等を歴任後、同24年6月、宮内省御料興局測量課長に就任した。そして特に山林測量技師として大きな功績を残した。それについては上條武著『孤高の道しるべ』（銀河書房）に詳しい。神足勝記は1937年（昭和12）7月7日死去した。享年82。

ボン大学留学生 三浦十郎

三浦十郎は弘化3年（1851）11月24日佐土原藩士の家に生まれた。文久3年2月学習館塾頭となり、元治元年郷学所生頭に任命された。戊辰の役には佐土原一番隊長として、官軍の先頭に立って討幕に加わり、各地に転戦し、赫々たる武勲を立てた。そして明治2年（1869）、佐土原藩主・島津忠寛の長男・忠亮公が外国留学することになった。これに家臣が随行することになったが、その第一陣として同年9月28日、忠亮公に従い丸岡武郎（大村純雄）、平山太郎、橋口宗議が米国へ先発した。

そして明治3年（1870）8月28日、第二陣として児玉章吉（日高次郎）、三浦十郎、木脇良（良太郎）、町田（島津）啓次郎がやはり米国へ向かった。当時の三浦は維新の戦争に勝って、幕府を倒したのは自分だと気負った若者であったから、アメリカ、イギリス、ドイツ何するものぞとばかり、佐土原藩が世界で一番強いと思っていたという。それで米国へ行くとドイツに行こうと言い出した。当時、フランスとドイツは戦争中で皆が危険だと云ったのであるが、三浦は構わずフランス経由でドイツへ向かった。この時木脇良太郎も同行したと推察される。木脇はこの時ベルリン大学に入学しているからである。現在ベルリンのフンボルト大学の公文書館にある資料によると、木脇は1872年（明治5）1月6日にベルリン大学に入学登録を行って、73年8月23日に退学している。